

リンの物語



1. 僕のこと

僕はこの春、生まれた。猫だ。黒と白が混じり合ったような色で、自分ではわりと気に入ってるけど、可愛いと言ってもらうことはあまりない。

だけど、いいのだ。

ユカはいつだって、僕を可愛いと言ってくれるから。

「リンは尻尾がいいね」

そうなのだ。尻尾は僕の自慢なのだ。

たいていの猫より長くて、白と黒がきれいな模様を描いている。

僕はだから、誇らしげに、尻尾を振る。

右へ、左へ。

左へ、右へ。

みんなが見る。猫も、人間も。

僕は尻尾を立てる。

それを見て、ユカは笑う。

「リンったら、なんだか得意げだね」

くすぐったい気持ちになる。

まあ、悪くない。

僕はリン。黒と白のブチ猫だ。

2. ジイのこと

ユカがどこの誰なのか、僕は知らない。

毎日やってきて、僕たちに餌をくれる。僕たちが住んでいるのは小さな公園だから、猫の数も少なくて、十匹かそこらだ。

ユカはみんなの名前を覚えていて、餌をくれるとき、ちゃんと声をかける。

「ピー、今日も元気だね」

「サラ、目の傷、だいぶよくなつたね。喧嘩しちゃ駄目だよ」

「トラキチ、君は太りすぎ。どこかでご飯を貰ってるでしょう」

「ジイ、元気でいてね」

ユカが撫でているのは、公園で一番、長く生きている猫だ。みんなもジイと呼んでいる。まさしく長老だ。毛はすっかり脂っ気を失ってパサパサだし、右目は見えない。左の、後ろ足はいつも、引きずっている。

みすぼらしいつたらない。

だけどジイを馬鹿にする猫はいない。近隣のボスだって、そうさ。たまにそいつらがジイのところに来て、なんやかんや、相談している。

そういうとき、僕たちは近寄れない。

ボスが怖いし、ジイも怖い。

だけど、ボスたちが行ってしまふと、ジイはただの老いぼれ猫に戻る。

ちつとも怖くない。

「ねえ、ジイ」

いつか尋ねたことがある。

ジイは座ったまま、僕を見た。右目が濁っていた。

「なにを話してたの」

「子供には関係ない」

「だけど……」

「トンボを捕まえたら、少しは教えてやる」

公園中を走った。トンボを追いかけた。けれど捕まえることはできなかった。あいつら、すばしっこいんだ。

三日ばかり頑張ったけど、駄目だった。

「無理だよ、ジイ」

そうかと呟いて、のっそりとジイは腰を上げた。ちよつとたつてから、ジイはトンボを啜えて戻ってきた。

僕はびっくりした。

「どうやって捕まえたの」

「コツがあるのさ」

ジイが言った途端、トンボが逃げていった。殺すほどは強く啜えていなかった。

たのだ。そんなことができるなんて、僕は知らなかった。

「まあまあだろう」

言ったジイは、なんだか得意気だった。

3. ユカのこと

ユカはとても優しい。

公園に来ると必ず、そこにいる仲間たちをすべて抱いてくれる。あのジイでさえ、ユカの腕の中にいるときは、心地良さそうだ。

もちろん僕も抱いてもらう。

「君の毛は柔らかいね」



ユカは言つて、背中を撫でてくれる。野良猫の僕だつて、いつか喉を鳴らしてしまふ。

たいてい朝に来て、制服というのを着ている。

これはジイが教えてくれた。

「佝髡校だな、あの制服は」

意味はわからないけど、ジイによると、ユカもまだまだ子供らしい。

ジイはこうも言つた。

「おまえと同じくらいだ」

なんとなくわかる気もする。

僕はまだまだ子供で、ボスにも、ジイにもかなわない。喧嘩をしたら、素早

いのは僕のほうだけど、とても勝てそうにない。

とにかく生まれたばかりの子猫つてわけじゃない。僕は。

だけど大人じゃない。

ユカも同じ感じがする。僕たちは似ている。

たまにいきがって公園の外に出たりすることがあるけど、その途端、どこかのオス猫に絡まれ、引つかかれる。

ものすごく痛い。

慌てて公園に逃げ帰る。

公園までは連中も追いかけてこない。

なぜだろうか。

4. ジイのこと。

ミミが教えてくれた。

「ジイはね」

夏の盛りだったろうか。公園にたくさん植えられている木の影が、その輪郭をくつきりさせていた。

僕たちは木の根もとに座り込み、じっとしていた。

「昔はすごかったの」

「すごいって……どんなふうに……」

「みんな、ジイのものだった」

「なに、それ」

「言葉の通りよ」

ミミはきれいな白猫だ。僕よりも三年か四年、あるいは六年か七年先に生まれたはずだけど、ちっともそんな感じがしない。

僕は最近、ミミを見ると、たまらない気持ちになることがある。

「ここら辺の、全部がね」

「全部……」

「そう、全部、ジイのものだった」

語るミミはベンチの上に座り、入念に毛の手入れをしていた。手を舐め、肩を舐め、長い尻尾もまた舐めた。

「ねえ、君」

「は？」

「名前は……」

「リン」

「そう、リンね」

ミミもまた、ジイのものだったんだろうか。

5. 町のこと

たいてい散歩に出かける。午後になると、なんだかそわそわして、公園の外に出たくなるのだ。

「気をつけてね、リン」

ミミは言う。

「よその猫に絡まれないようにね」

「うん」

「本当に困ったらジイの名前を出せばいいわ。でも出さないほうがいいわ」

僕には意味がわからない。ミミは公園で一番いい場所、風の流れがよくて、みんなから見えるところに座り、体を舐めている。手入れに怠りがない。

「わからないよ、ミミ」

「ジイの知り合いだって言ったら、あなたに手を出す奴はいないわ。どこのボス猫でもね。だけど、それじゃ、つまらないでしょう。あなた、男の子なんだから。ジイの名前で助かりたいかしら」

「嫌だ」

「自分でどうにかしたいでしょう」

「うん」

「そういうことよ。行ってらっしゃい」

公園を出る。町に入る。ちょっと行った先におでん屋がある。この女主人は猫が嫌いなので、慌てて通り過ぎる。突き当たりが花屋だ。若い女の子がいて、いつも鶏のササミをくれる。にゃあにゃあ鳴いていると、彼女はすぐに出てくる。お客さんもたいいてい、僕を撫でてくれる。人は優しい。とはいっても、油断してはいけない。夏前、公園仲間のユウは、スーツ姿の若い男に蹴られた。ただ餌を求めただけなのに、腹が減っただけなのに、その男はいきなりユウを蹴飛ばした。一度じゃない。二度も、三度も、蹴飛ばした。やがて動かなくなっ

たユウを、男はボールみたいに蹴飛ばし続けた。笑っていた。ユウは死んだ。僕たちは人間がいないと暮らしていけない。だけど、僕たちを殺すのもまた、人間なのだった。

ササミを食べ、たつぷり撫でてもらったあと、左に曲がって、すぐ右へ。大通りより路地のほうが落ち着くし、なにより安全だ。いきなり蹴飛ばされたりしない。ひょいと塀に登り、その上を歩く。とてもいい気持ちだ。風が吹く。ヒゲが揺れる。僕は青い空を見上げる。

「なんだ、おまえ」

気がつくくと、目の前に二丁目のボスがいた。僕が先に塀の上を歩いていた。

つまり二丁目のボスは、あとから塀に登ってきたのだ。

「ここは俺さまの道だ」

「は？」

「どけ、チビめ」

塀から下りようかと考えた。逃げてしまえば、それだけのこと。二丁目のボスもいちいち、追いかけてきたりはしないだろう。

だけど誰かが嫌がっていた。僕の中にある誰かだった。

「僕が先にいたんだ」

そいつが言った。

「だから、どかない」

「そうか」

二丁目のボスは嬉しそうな顔をした。飛びかかってきた。僕だって同じだった。塀から転げ落ち、背中を打ったけど、まったく痛みは感じず、二丁目のボスに爪を立てた。足で蹴った。僕たちは絡み合って、団子のようになり、大きな声を上げた。やっぱり勝てなかった。ボスの爪は鋭く、僕の鼻を引き裂いた。蹴る力は強く、お腹が痛くなった。一分もたたず、僕は逃げだした。

「逃げろ」

二丁目のボスが叫んだ。

「弱虫め」

さんざんの体で、公園に戻った。ああ、僕は逃げた。弱虫だった。悔しかった。そんな僕を、ミミは舐めてくれた。

「ひどい傷ね」

「たいしたことなら」

僕は強がった。

「そうかしら」

「うん、こんなのをいしたことない」

ジイがやってきた。

「誰と喧嘩した」

「二丁目のボス」

「そうか」

ジイはなんだか嬉しそうだ。

「あいつはなかなかだ」

「うん」

「勝てたか」

「負けた」

そりゃそうだと言って、ジイは去っていった。

6. ユカの銀色の輪のこと

今日もまた、ユカが来た。

いつものように、餌をたっぷりとくれた。僕はお腹いっぱい食べた。みんなもそうだった。ユカはたいてい早朝に来る。

その時間だと、他の誰かに文句を言われないからだ。

本当はいけならしい。

僕たちみたいな野良猫に餌をやるのは。

「ほら、これ、おらしらよ」

手の中の餌を、ユカがくれる。僕は舌で舐めとる。

ユカがくすくす笑う。

「くすぐったいよ、リン」

確かにおいしい餌だった。口の周りを舐めながら顔を上げた僕は、ユカの首筋に光るものがあることに気づいた。

それは銀色で、とても美しかった。

制服にはいささか不釣り合いな気がしたけど、僕の視線に気づいたユカは、嬉しそうな、恥ずかしそうな顔をした。

「本当はね、つけちゃ駄目なの。学校に行く前にとらないとね」

そして僕の頭を撫でる。つい喉が鳴る。

ユカが行ってしまったあと、僕はおいしかった餌のことを考えながら、同時に銀色の輝きのことも考えた。

教えてくれたのはミミだった。

「誰かにもらったのよ」

「え、誰かって」

「男の子に決まってるじゃない」

なんだか不思議な気持ちになった。ユカは僕のものだという気がした。けど、そうじゃないことはすぐにわかった。

僕は猫だ。ユカは人間だ。

なにより僕を落ち込ませ、そして嬉しくさせたのは、ユカの笑顔だった。あの銀色の輪を手にするとき、彼女は本当に嬉しそうだった。

彼女が嬉しいと、僕も嬉しい。悔しいけど、嬉しい。

不思議なものだ。

「ねえ、ミニ」

「なに」

「男の子に銀色の輪をもらうと、ユカは嬉しいのかな」

「あれはプラチナね」

「プラチナってなに」



「銀色の輪のことよ。材質がね、プラチナなの。とても高価なものよ。だけど、嬉しいのは高価なものをもらったことじゃなくて、男の子の気持ち」

「気持ち……」

「そうよ。気持ちが一番、嬉しいの。女って本当はそれだけでいいの」
やっぱり僕は悔しくなった。

僕はユカに気持ちを渡せない。大好きなのに。だけど、ミミを見ていると、それでいいんだという気もしてきた。

僕が恋する相手はやっぱりユカじゃない。

少し考えた末、僕は言った。

「ユカ、嬉しそうだったね」

「愛されてるのよ」

「そう……」

「一番の宝物よ」

僕にはわからない。誰かを愛したことなどないから。愛されたことなどないから。僕はまだ、ただの子供だ。

子猫だ。

7. 日々のこと

夏が過ぎ、秋が来て、なにも変わらなかった。ユカの胸元ではプラチナが輝いていたし、ジイは元気だったし、ミミはきれいだった。

僕は体が大きくなった。

強くなった。

また二丁目のボスとぶつかったけど、この前よりは、長く戦えた。向こうも

いくらか傷を負ったんじゃないかな。

ああ、とミミは嘆く。

「どうして男の子ってこうなのかしら」

「なにが」

僕の鼻先を、彼女は舐めてくれた。二丁目のボスに引つかかれたのだ。

「傷ばかり」

「いいだろう、別に」

「生意気よ、リン」

荒っぽく舐められたので、僕は悲鳴を上げた。ミミは容赦がない。慌てて逃げだした。ミミにはかなわない。

ジイに会った。

「どうしたの、ジイ」

尋ねてみる。

しかしジイは答えない。

空を見ている。



「なんなの」

「もうすぐ冬が来る」

「冬？」

「寒くなるということだ」

「ふうん」

僕は冬とやらを知らない。なにしろ、この春、生まれたばかりなのだ。ジイが言うところによると、春は暖かく、夏は暑く、秋は過ごしやすい。そして冬は寒さ。

「たくさんの猫が死ぬ」

ジイは言う。

僕は問う。

「なぜ」

「寒さは強さ」

「ジイでも勝てないの」

「そうだ」

「ジイは強いんだろう」

「もっと強さ」

過ごしやすい秋は、のんびり日を重ねていった。いろいろな実が公園に落ちて、不思議な香りを漂わせた。

空の色も変わった。公園にやってくる人が増えた。

「紅葉を見にきてるのよ」

「ミミミが教えてくれた。」

「なにそれ」

「ほら、葉っぱが色づいているでしょう」

「うん」

「人間はあれを美しいと思うの」

「なぜ」

「わたしにもわからないわ。とにかく、そうなの。あら——」

「どうしたんだよ、ミミミ」

尋ねつつ、その視線を追った僕は驚いた。ユカがいた。そして、その隣に、

男がいた。ユカとは違って、スーツを着ていた。大人だった。

ふたりはベンチに腰かけた。

「リン、待ってなさい。わたしがいいって言うまで、近づかないようにね」

「どうして」

「いいって言ったなら、彼らに駆けていくのよ。大慌てでね」

「どうして」

「たまには道具になりなさい」

まったく意味がわからなかった。けれどミミミに逆らうことなんてできるわけがなく、ベンチの下にうずくまり、ユカを見ていた。

ユカはうつむいていた。

男ばかりが喋っていた。

どれくらいたったのだろうか。よくわからない。公園にある時計の長い針が、ぐるりと一周した。

男は立ち去り、ユカだけが残った。

「行きなさい、リン」

やがてミミが言った。

「ほら、駆けるのよ」

「今？」

「ええ、今よ。ユカの足下まで駆けて行って、とにかく鳴くの。口をいっぱい開けてね。大声で鳴くの」

「なぜ」

「そうしなさい」

ミミに急かされ、僕はそうした。駆けて行って、声を張り上げた。途端にユカの頬が緩み、僕を抱き上げた。

「リン」

彼女は言った。

「リン」

優しく抱かれるのは嬉しかった。なのに悲しかった。なぜだろう。

8. 雪

なにかが視界をよぎった。

「あれ——」

見上げると、空から白いものがいっぱい降ってきた。らくつも、らくつも、らくつも。舞うように落ちてくる。

一緒にいたミミもまた、顔を上げた。

「あら、雪よ」

「なにそれ」

「冬が来たの」

僕が知らない冬だ。ずっと見上げていると、やがてジイがやってきた。寒く
なりはじめてから、ジイの左の、後ろ足は、かつていろんな猫を蹴飛ばした足
は、ほとんど動かなくなっていた。今もジイは足を引きずっている。

「なにをしているんだ」

「雪を見てる」

「おまえ、雪は初めてか」

「うん」

「雪は怖い。冬は怖い」

「やっぱりジイでも勝てない？」

「無理だ」

ジイは顔を上げた。そしてなぜか、ミミは顔を伏せた。僕はジイとミミの両方を、何度も何度も確かめた。

「リン、ベンチの下に行け」

「なぜ」

「あそこは暖かい。地下鉄の廃棄熱が出てくる」

「あ、うん」

「今晚はそこで眠れ」

確かに暖かかった。ベンチの下にうずくまり、地下鉄の廃熱にくるまれながら、僕はいつか眠りに落ちていた。たまに目を覚ますと、ずっと雪が降っていた。どんだんどんだん降っていた。

9. ふたたび、ジイのこと

ジイは公園の出口で死んでいた。雪に埋もれていた。ろくに足が動かないジイが、公園の外に出るなんて無茶な話だった。雪が降っていた。風が吹いていた。夜の闇が落ちていた。それでもジイは公園を出ようとした。

「なんでだろう」

呟く僕の横で、ミミは言った。

「ジイだから」

「うん」

「決めてたのよ」

わかる気もしたし、わからない気もした。だけど頷いていた。雪の中に埋まり、ジイはもう、まったく動かなかった。

やがて、たくさんの猫が集まったきた。

一丁目のボス。

二丁目のボス。

三丁目のボス。

普段なら、顔を合わせただけで喧嘩が始まるのに、全員がただ、そこに立つ

ていた。去ってしまったものを、どこかに向かおうとしたものの思いを、受け止めていた。

ジイは外を目指したのだ。

無理だと知りつつ。

それでも歩こうとしたのだ。

10. 種は芽吹く

時間がたった。雪はもう降らない。吹く風に、髭を揺らすそれに、ぬくもりを感じるようになった。僕の体はさらに大きくなった。毛はツヤツヤだ。

「あらまあ」

ミンミンが言う。

「生意気よ」

「なにが」

「男の振りしちゃって」

これに関しては何ミミが間違ってると思う。僕は男なのだ。この前、二丁目のボスと喧嘩した。けっこういい勝負だった。もう少して勝てるかもしれない。

ユカはしばらく暗い顔をしていたけれど、だんだんと元氣を取り戻していった。

以前のユカに戻った。

ちゃんと餌をくれる。

それでも時々、僕のことを、ユカはぎゅっと抱きしめる。リン、リン、と僕の名を呼ぶ。手が震えていることもある。ちよつと強くて、痛いくらいだけど、

僕は我慢する。

だって僕は男だから。

もうジイはいない。

ユカは銀色の輪を首にかけていない。

そして今日、僕は公園を出る。ただの散歩じゃない。花屋に鶏のササミを貰うためでもない。もう二度と公園に戻らないつもりだった。

「行くのね」

「ミミの問いに頷く。

ああ、と言う。

「僕は外を見てみたい。ジイのように」

「はいわ。行ってらっしゃい」

とめられると思っていたので、その言葉は意外だった。

「ミミはさ、僕が行ってもいいの」

「だって、あなた、行きたいんでしょう。じゃあ、そうなさい。いっぱい喧嘩して、縄張りを守って、女の子と恋に落ちなさい。それでもってね、たくさん子供を作るのよ。数え切れないくらいの子供をね」

「うん」

「行きなさい」

頷いて、僕は公園を出た。

まったく知らない世界を知るために。

歩き出した。

文 橋本紡

絵 高野音彦

デザイン 近田火日輝 (fireworks.yc)

この作品を、被災された方にお贈りします。